

知の交流の場としての学会

総務理事 村田正幸



いきなり個人的な話で恐縮ですが、最近、生物に学ぶ情報科学技術の研究にはまっています。もちろん生物に学ぶという視点は昔から数多くありますが、情報科学技術やナノ計測技術などの発展によって、生物学も新たな飛躍を迎えつつあるというのが現況です。特に、生物をシステムの観点からとらえることによって見いだされた、環境変化に対する柔軟性や応答性には、情報ネットワーク分野においても学ぶべき点が多くあります。もちろん、その数理的構造を究めようとする、生物学者だけでなく、数学者や物理学者にも教を請う必要があります。それぞれの分野の研究者が、それまでの研究生活の中で意識的、無意識的に身に付けてきた考え方や手法、習性というのは恐ろしいもので、それら乗り越えて議論することは簡単なことではありませんが、ちょっとした議論の中でも新しい発見や考え方の芽が出てくるのには驚かされます。大上段に振りかぶって言いますと、最先端科学技術の融合に基づく情報科学技術の新たな展開ということになりますが、同じようなことをもくろんでいる技術分野はシステム工学や機械工学など結構多いことも最近知りました。もちろん、このような知の融合が必要とされるのは生物学と工学の組合せにとどまりません。社会学や経済学、医学などとの融合もよく指摘されるところです。

前置きが長くなりました。よく指摘されるように、最先端科学技術の融合は、知の創造を実現するアプローチの一つです。学会はそのための有力なプラットフォームになると考えています。電子情報通信学会は一義的には電子情報通信にかかわる科学技術分野のコミュニティのためのもので、同分野の科学技術を発展させていくことが使命でしょう。これまで同分野の科学技術の発展を100年近くにわたって支えてきた本学会は、その学術的深化に大きく寄与してきたことは間違いありません。しかし、学術の深化はともすれば、学術分野の細分化や狭あい化、言い換えればタコつぼ化を招き、研究者がそこから脱出するのは簡単ではありません。現在、研究専門委員会は数多くありますが、そのような現状はタコつぼ化の結果に見えて仕方ありません。

このような観点からも、本学会が我が国における電子情報通信分野の新たな発展に果たすべき役割は非常に大きいと思います。工学や理学、社会科学の枠も乗り越えないといけません。その前に学会における研究会やソサイエティの枠を越えるだけでも意義は大いにあると思います。研究会の共催や併催、総合大会やソサイエティ大会は、その第一歩であることは間違いありませんが、言いつ放し、聞きつ放しになっていないかという懸念が大いにあります。学会が会員に対するサービスの充実策として様々な仕掛けを提供していくことはもちろん大事ですが、それだけでなく、学会がオピニオンリーダーとして大きな潮流を作っていくこともまた必要なことかと思えます。昨今の若年層のいわゆる科学離れ、学生の電子情報通信分野に対する人気低下に対して、学会は様々な施策をとっていますが、それと同時に夢のある電子情報通信分野の未来を描くこと、そのために「おもしろい」学術領域を創成していくことも学会の重要な機能だと思えます。

総務理事を仰せつかっている立場として学会の会員に対するサービス向上に取り組んでいくのは当然のことですし、また、そのための健全経営の確立ももちろん必要なことです。しかし、上記のような取組みは、施策として技術的に解決できるものでは決してありません。会員の皆様の総意として、取り組んでいくことができればと切に願っております。